

『この手紙、加賀美 知子より。』

★ 登場人物

☆ ひかる
☆ シノブ
☆ 麻里子
☆ ひかるの母親
☆ 容疑者 X
☆ 容疑者 X の彼女
☆ 郵便屋

第 1 場

☆ひかる・シノブ・麻里子の3人はインチキ靈能者のテレビを見ている。幕が開くと電話が鳴る。近くにいたシノブが電話に出る。

シノブ 「はい、もしもし……ええ。…村松シノブは僕ですが……はい。

あー、ちよつと待ってもらえますか。」

☆シノブ奥に掛ける。

ひかる 「うわー、この人馬鹿だなあ、なんでこんな怪しい物に5万も払うのかねえ。」
麻里子 「えー、このお札ご利益ありそうじゃん。」

ひかる 「麻里子は昔っから、騙されやすいもんね。」

麻里子 「そんなことない、ひかるとならいい勝負だよ。」

☆シノブ奥から登場。

シノブ 「ねえねえ、悪いんだけどさ、何も言わずに30万程貸してくれない？」

ひかる 「は！？いきなりどうしたの、そんな大金持って無いし

こっちの月給知ってるでしょ？15万だよ？30万って丸2ヶ月分だよ？」

シノブ 「そうだよな……いや半分でもいいんだ、15万でも……」

ひかる 「無理だって！なにがあったの？今の電話、なんかトラブルだったの？」

シノブ 「……うん、ちよつと……じゃないかも……少しでも……5万だけでもいいんだ……

お願い……！お願いします！」

ひかる 「待つて待つて、何があったの？ちゃんと説明してよ。」

シノブ 「今は事情があつてまだ言えない、でも落ち着いたら必ず全部話す。

……だから5万だけ、お願いします！」

ひかる 「……あーもう、後で絶対に全部話すんだよね？」

シノブ 「約束する。え、じゃあ貸してくれるの？」

ひかる 「5万だけね、困ってるみたいだし利子とかいいから、

こっちも少しは貯金あるからそんなに急いで返さなくてもいいよ。はい。」

シノブ 「と、まあこうやるわけだ。」

ひかる 「……なにが？」

シノブ 「大きなことから少しずつ要求を低くしていく、

そのテレビに出てる人が5万も払う気になったトリック。」

麻里子 「おー、鮮やかな手口。」

シノブ 「うわー、この人馬鹿だなあ、なんでこんな怪しい者に5万も払うのかねえ。」

ひかる 「うるさい！もうあなたの言うことなんて聞いてあげないんだからね！」

麻里子 「まあまあ、今日は3人でこの部屋の掃除するんでしょ？ね？」

シノブ「じゃあとりあえずこの5万を部屋にしまってくるわ。」
ひかる「返せバカ！」

麻里子「あ、ひかる、ついでにその雑巾取ってよ。」
ひかる「もう、はい。」

麻里子「よし、じゃあ水汲んでくるから適当に整理しといて。」
ひかる「はいはい。」

☆麻里子、奥に掃ける。ひかるとシノブは部屋の整理をしながら話し始める。

シノブ「そういえば、ひかるのポスト郵便物で溢れてたぞ。」
ひかる「あ、そっか。旅行に行ってからずっと見てないや。」

ゴミ出すついでに取ってきてよ。」

シノブ「さりげなくゴミ出しを押し付けるな、それに自分の郵便物はもう取ってきた。」
ひかる「シノブだっていつもめんどくさがって、取ってくるだけで中身見ないじゃん。」
シノブ「あれは俺のコレクションだ。」

コレクションは封を開けないのが俺のポリシーだ。」

☆麻里子、バケツを持って奥から登場。

麻里子「さ、ケンカになる前に始めるよ。」

私は窓拭くからシノブは床、ひかるはゴミ集めてね。」

ひかる「はいはい。」

シノブ「はいよ。」

麻里子「：飽きた。」

シノブ「はやっ！」

麻里子「私この水捨ててくるから、ひかるはゴミ集めたら袋縛っちゃって。」

ひかる「はくい。」

麻里子「あ、ついでにそれ出してきちやって。」

ひかる「しょうがないなあ。」

☆郵便屋が下手からポスト前に登場。麻里子はバケツを持って奥へ

ひかるはゴミ袋を持って外へ出る。郵便屋はポストが溢れていて困っている。

麻里子はすぐ戻ってきてシノブと再びテレビを見始める。

シノブ「なあ：ひかるがゴミ出しに行くのって珍しいな。」

麻里子「小さなことから少しずつ要求を高くしていく

テレビに出てた人が5万も払う気になったトリックその2。」

シノブ「おー、鮮やかな手口。」

☆ひかるゴミ袋をゴミ捨て場に捨てる。

郵便屋に気付かず部屋に戻ろうとするが郵便屋に呼び止められる。

郵便屋「あの！」

ひかる「はい？」

郵便屋「先月からこの辺りの配達を任されることになった者です。」

住人の方と出会ったら一応ご挨拶をしておこうかと思ひまして。」

ひかる「そうですか、それはご丁寧にどうも。では。」

郵便屋「あの！」

ひかる「はい？まだなにか？」

郵便屋「こちらの松村さんのポストなんですが

郵便物がもういっぱい、どうしたらいいものかと…」

ひかる「…あはははは、すいません。1ヶ月程旅行をしていたもので

こちらは寒いですね、今すぐ空にします、あはははは。」

郵便屋「あ、あなたが松村さんでしたか

でしたらとりあえず今日の分を受け取ってもらえればいいですよ。」

ひかる「いえ！実は私、こう見えてキレイ好きな女ですので！

これはたまたま！あはは、あはははは。」

郵便屋「そう、ですか。」

ひかる「そうなんです！友達からいつも言われるんですよね。

あなたがいると部屋が勝手にキレイになるわって。あはははは。

寒い中ご苦労様です。では御機嫌よう。」

郵便屋「ありがとうございます。」

☆ひかるポストの中身を掻き集めて部屋に戻る。

郵便屋は持ってきた郵便物をそれぞれのポストに入れて捌ける。

麻里子「おかえり〜。お、ちゃんとポスト見てきたんだ、偉いじゃん。」

ひかる「もうお嫁に行けない…」

シノブ「どうした。ゴミを出しに行ったら郵便屋さんがポストの前で困ってて

まさかその溢れたポストが年頃の女である自分のだとは言ひ出せずに

知らん振りして逃げ出そうとしたら郵便屋さんに呼び止められて

言わなきゃいいのに自分のポストだとバレるようなことを言っ

慌てて中身を掻き集めて帰ってきたような顔は。」

ひかる「知らん振りしたんじゃない！気付かなかったの！」

シノブ「…俺すごくない？」

麻里子「そこまで予測されるひかるがすごいよね…」

☆ひかるはテーブルに山のように郵便物を置いてうなだれる。

麻里子が郵便物を物色し始める。

麻里子「もう、ふてくされないの、ひかるが悪いんでしょ？」

シノブ「俺、シャワー浴びてくるわ。麻里子、あんまりひかるをいじめるなよ。」
ひかる「お前が言うな！」

☆シノブ奥に捌ける、麻里子は物色を続けている。

ひかる「もう寝る。」

麻里子「ちよつと、これなんとかして行ってよ。」

大事なものだつてあるかもしれないでしょ。」

ひかる「捨てといて、どうせ広告ばかりだから。」

麻里子「手紙発見！ほら。：ん？これも、これもだ、同じ封筒、同じ人からかな？

1ヶ月も旅行してたんだし、今頃連絡つかなくて困ってるんじゃない？」

ひかる「誰から？」

麻里子「封筒には書いてない。中に書いてあるんじゃないの？」

☆ひかる封筒を開けながら

ひかる「めんどくさい人だなあ：えーつと：。」

麻里子「名前書いてあつた？」

ひかる「うん。【加賀美 知子】さん。」

：すごく申し訳ないんだけど名前に覚えがない。」

麻里子「3通もあるんだし、中身を読めばなんとなく誰かわかるんじゃない？」

ひかる「ほんとめんどくさい人だなあ、あ、そちの封筒も開けちゃつて。」

麻里子「もう：はい。何も書いてないから封筒捨てちゃうね。」

☆麻里子がゴミ箱に封筒を捨てると、シノブ奥からタオルを持って再登場。

シノブ「ただいま。まだブツブツ言つてるの？」

ひかる「ダメだ、1人じゃ読む気がしない。」

はい麻里子、はいシノブ、じゃあ1通ずつ読もうか。」

シノブ「全然意味がわからないんですけど。」

ひかる「正体不明の容疑者Xからの手紙が3通：

その3通の手紙には容疑者Xを見つけるためのヒントがつ！」

シノブ「OK、燃えてきた。」

麻里子「つつこまないからね！」

☆手紙を読む3人。

第 2 場

ひかる「とりあえず：読んだけど…」

麻里子「読んだよ：ちよつと困つてるとかいふ感じじゃないよ？誰かわからないの？」

☆ひかる首を振る。シノブは真剣な表情で手紙を読んでいる。

シノブ「俺も終わったけど：これって、俺が読んでよかったのか？」

麻里子「手紙が届いた日付は、ひかるが持つてるのが最初

2番目がシノブの、私のが最後だね。」

ひかる「じゃあさ、読んだ内容をかいつまんで話してよ

届いた順番に、最初は私だね。」

麻里子「もう、全部読むのが面倒臭くて言ってるでしょ。」

シノブ「俺は別にいいよ。内容が内容だけ…」

ひかる「じゃあ私から、【お元気ですか？なかなか連絡がもらえなくて悲しいです。

ひよつとして私のことを忘れてしまいましたか？】」

麻里子「うわー、ドンピシャじゃん。

忘れてるどころか名前見てもわからないんだもんね。」

シノブ「麻里子、茶化すな。次は俺のだ。【思いつきを大切にしたいので

しつこく思われるのを覚悟でまた手紙を書きました。

あの時やめておこうと思つた子供の写真を同封します。元気な男の子です。】」

☆3人沈黙、少しの間。

麻里子「なんか：よくわからなくなってきたけど、とりあえず私のも読むね。

【会いたいです。今も、楽しかったあの頃を思い出しながら

この手紙を書いています。会つて子供のことをお話したいです。

勝手ではありませんが来週にでも伺わせて頂きます。】」

ひかる「どういうこと？：意味がわからない。：無視していいのかな。」

シノブ「なに言ってるんだ！あの時やめておこうと思つた子供って書いてあるんだ！

責任があるだろう！」

麻里子「おかしなこと言ってるのはシノブでしょ。ひかるは女だよ？

自分が知らない子供なんているわけないじゃん。」

シノブ「あ、そうか：え？じゃあどういうこと？：出し間違いとか？」

麻里子「わからない：でも宛先の住所はここだったし。」

ひかる「宛名もちゃんと私の名前になつた。」

☆ひかるの一言と同時に下手からひかるの母親が登場。玄関前でチャイムを鳴らす。

3人はチャイムの音に驚いて玄関を見つめる。

シノブ「…麻里子さつき、勝手に伺うって言ってたよな。」

ひかる「麻里子！出て！」

麻里子「なんで私なの！シノブ！ほら！」

シノブ「言われると思ってたけどさ…突然刺されたらすぐ救急車呼んでくれよ。」

☆ひかる・麻里子激しく頷く。シノブが恐る恐る玄関を開ける。

ひかる「お母さん！」

母親「ひかる、麻里子ちゃん、おかえり。って、訪ねて来た私が言うのも変か
旅行楽しかった？いい所だったでしょう。」

ひかる「紛らわしいタイミングで登場しないでよ！」

麻里子「お婆様、お久しぶりです。」

母親「お久しぶり。タイミングって、今日来るってちゃんと電話したじゃない。」

ひかる「…あ、忘れてた。」

母親「そちらの男性は、初めましてね、ひかるの母です。」

…ひかる、あんた男ができたの？」

ひかる「違っ」

麻里子「やだもうお婆様だったら、男かどうかなんて生まれてくるまでわかりませんわ。」

母親「まあ！」

ひ&シ「おい！」

シノブ「勘違いするようなこと言うな！いや、今のは嘘ですよ！」

麻里子「そうですわね、失礼しました。男の子でしたの、写真もここに。」

母親「生まれてるの！？」

ひ&シ「おい！」

シノブ「いや、違うんですよ？この写真はちょっと込み入った理由がありました

僕とひかるはなんにもなくてですね。」

母親「そんなに一生懸命否定しなくてもいいわ。」

1年2年会ってないわけじゃないんだし、妊娠してたんならわかるわよ。」

シノブ「なかなかいい性格してますね…」

母親「あら、よく言われるのよね、顔も性格もいって。

ところでこの写真は？込み入った理由って？」

ひかる「ああ、この手紙読んでみてよ。」

私宛てに来てたんだけどちょっと気味が悪くてさ。」

母親「いいわよ、訪ねて来たはいいけど、どうせやることもないからね。」

☆母親・1人で手紙を読み始める。

麻里子「お婆様、変わらないね。」

ひかる「うん、ミステリーとかサスペンス好きも相変わらずだからお母さんなら何かわかるかもね。」

シノブ「ほう、ミステリーとかサスペンスなら俺も好きだぞで、推理力ほどの程度なの？」

ひかる「新聞のテレビ欄を見て、役者の名前が書いてある順番で犯人がわかるレベル。」

シノブ「すごいな！」

母親「大体の事情はわかったわ

私が来たからにはもう事件は解決したようなもの。安心なさい。」

第3場

麻里子「おば様、何かわかったの？」

母親「私を誰だと思ってるの？近所の方々は私のことをこう言うわ

ミステリーの女王って！……ってね！」

シノブ「バカにされてるじゃん！」

母親「この手紙は……そうね、これは私の経験から言って

犯人はこの騒動の直前までに登場してる可能性が高いわ。」

シノブ「それ、テレビとか小説の話じゃあ……」

母親「そして顔見知りの犯行ね。」

だって無差別や通りすがりの悪戯じゃ、お話として成り立たないもの！」

シノブ「いや、だからそれって……」

麻里子「さすが、おば様！それで犯人は誰なの？手紙の意味は？」

母親「そうね……まだ手紙の意味はわからないけど、犯人の目星はついてるわ。」

ひかる「え！？誰？誰なの？」

母親「その前に、あなた達はこの差出人に心当たりは無いのよね？」

☆ひかる・シノブ・麻里子はお互いを確認するように頷きあう。

母親「ふふっ。本当にそうかしらね。紙とペンある？」

麻里子「はい、おば様。」

母親「ありがと。ひかる、差出人の名前を漢字で1文字ずつ言ってくれる？」

☆母親は言われた漢字を1文字ずつ5枚の紙に書く。

ひかる「うん……加えるの【加】年賀状の【賀】美しいの【美】

えーっと、知恵の輪の【知】子供の【子】だよ。」

☆母親が書き終わると、ひかるが下手側、シノブが中央、麻里子が上手側にいる。

ひかるに【加】と【賀】、シノブに【美】、麻里子に【知】と【子】の紙を持たせる。

母親「はい、3人共持ったわね。

シノブ君、わかりにくいからもうちよつと近づいて。」

シノブ「はい。」

☆シノブ、ひかるの方へ近づく。

母親「シノブ君、違うわ、麻里子ちゃんに近づいて。」

シノブ「え？…はい。」

☆シノブ、麻里子の方へ近づく。

麻里子「…あ！」

シノブ「え？あー！そうか！その手があつたか！

加賀美 知子じゃない、加賀 美知子か！」

母親「はっはっは！私に掛ければこれくらいは簡単なのよ。

さあ、呼んでもいいのよ、ミステリーの女王と！」

☆母親・シノブ・麻里子、興奮気味にはしゃぐ。それを遮るひかるの一言。

ひかる「…で、加賀 美知子って誰？」

母親「…え？」

ひかる「え？じゃなくてさ、この騒動の直前どころか今までの私の人生に

加賀 美知子って人は登場してないし、当然だけど顔見知りじゃない。

つまり、加賀 美知子って名前にも心当たりはないんですけど。」

シノブ「なんでだよ！俺今すごい感動してたのに！心当たりあれよ！」

麻里子「そんなこと言ったって仕方ないじゃない。

おば様、他になにかわかったことは？」

母親「うーん、今のところはなにも。

もう一度手紙の内容を整理して考え直してみましよう。

なにかヒントが見つかるかもしれない。」

ひかる「まあ妥当だね、最初はこれ【お元気ですか？連絡がもらえなくて悲しいです。

ひよつとして私のことを忘れてしまいましたか？】」

麻里子「もうここからおかしいよね、お元気ですか？つてさ

久しぶりに連絡する時みたいな言葉だけど、連絡がもらえなくて悲しいって

連絡が来て当然のような言い方だし。それに普通は久しぶりの手紙なら

忘れてますか、じゃなくて、覚えてますか、でしょ？」

シノブ 「次はこれ【思い出を大切にしたいのでしつこく思われるのを覚悟でまた手紙を書きました。

母親 「あの時やめておこうと思った子供の写真を同封します。元気な男の子です。】」

シノブ 「おかしいうちで言うならこれのほうがおかしい。」

シノブ 「俺、隠し子なんていないですよ！」

ひかる 「一応、脅迫文とか告発文として意味が通るってことでしょ。」

麻里子 「最後はこれ【会いたいです。今も、楽しかったあの頃を思い出しながらこの手紙を書いています。会って子供のことをお話したいです。】」

勝手ではありませんが来週にでも伺わせて頂きます。」

ひかる 「これに勝手に伺うとか書いてあるせいで

お母さん相手にビクビクしたんだよね。」

母親 「だからタイミングがどうこうって言うってたのね。」

じゃあその手紙で言う来週ってというのが今週なの？」

ひ&シ 「あ…」

ひかる 「3通とも旅行に行ってる間にポストに入ってたから…」

麻里子 「ん？私、封筒に消印あったから見たよ。1枚目が丁度旅行に出発した日。

2枚目がその丁度1週間後。3枚目はそのまた丁度1週間後。」

母親 「つてことは？」

シノブ 「来るはずだったのは先週なのか。」

ひかる 「知ってたならあのととき言ってよ！」

麻里子 「容疑者Xは私達が旅行に行っていたことを知らない人物ってことだね。」

ひかる 「私にとっては、名前も知らない人物だけだね。

顔を見たら誰かわかるだろうけど。」

シノブ 「…本当に顔を見たら誰かわかるのか？」

ひかる 「失礼な人だなく、記憶力には自信がありますから。」

母親 「私が来ることをすっかり忘れてたのはどなたでしたっけ？」

ひかる 「あれはこの手紙のせいでドタバタしてたから。」

シノブ 「そういうことじゃなくてさ

ひかるはこの容疑者Xの顔を知らないんじゃないか？」

ひかる 「どういうこと？」

シノブ 「その逆で、容疑者Xもひかるの顔を知らないんじゃないかってこと。」

ひかる 「え？もうちよつとわかりやすく言ってよ。」

シノブ 「だから！…ほら、俺とひかるが初めて会ったとき

友達から名前だけ先に聞いてたせいで、俺はひかるのこと男だと思ってたし

ひかるは俺のこと女だと思ってただろ。」

ひかる 「ああ、懐かしいねえ。」

麻里子 「わかった！容疑者Xはひかるを男だと思ってるからこんな文章になったのね！」

シノブ 「そう！俺が最後まで言いたかったんだけどそう！」

母親「ということとは、ひかるの顔も知らない人からの夕チの悪い悪戯だったこと？
それじゃお話として成り立たないわ。そんな推理、私は認めない。」

シノブ「だからそれはテレビとかの話で…」
麻里子「じゃあ誰からの悪戯なの？」

ひかるの顔を全く知らない人がやるにはちよつと手が込み過ぎだと思ふ。
子供の写真だつてあるし、3週連続でわざわざ手紙だよ？

目の前で、とか電話でなら反応がわかるけどさ、手紙だよ？」

ひかる「実は監視カメラがあるとか。」

麻里子「カメラがあつたら、ひかるが女だつてわかるでしょ。」

3人とも名前で呼ぶことが多いし。」

シノブ「見てるなら旅行に行つてるのもわかるだろうしな。問題外。」

母親「つまり、住所は知つていて、旅行に行つてたことは知らない。」

ひかるの名前は知つていて、女だとは知らない。

そしてこの手紙でひかるがどういふ反応をするかを知ることが出来る人物ね。

ひかる、心当たりは？」

ひかる「反応を知ることが出来る人物つて、例えば？」

麻里子「ほら、会つたことないけど近所に住んでる人とかさ

会社で友達に相談するならその人の友達とか、あとは…メル友とか。

よくパソコンで話すけど、音声じゃなくて文字だけの繋がりの人とか。」

ひかる「…いる。」

麻里子「誰!？」

ひかる「パソコンで知り合つた人。どこ住んでるの?つて聞かれたの。」

愛知県の安城市ですつて言つたら名産品つてなんだつて言われて

イチジクで有名ですつて言つたら、久しぶりに食べたいつて言うから

向ここの住所と名前聞いて送つてあげたの。」

母親「それで自分の住所と名前も書いたのね。相手の住所と名前は?控えてあるの?」

ひかる「あるけど、加賀美 知子さんじゃないよ?加賀 美知子さんでもないし。」

シノブ「こんな悪戯するときに本名なんか使うかよ

加賀なんとかなんて偽名に決まつてる、いいから早く見せてみる。」

☆ひかるの財布から控えの紙を取り出してシノブに渡す。

シノブ「…男か!」

麻里子「そつか、悪戯目的の偽名なら性別は関係ないもんね。

ここつて車で1時間くらいじゃん。どうする?」

シノブ「もちろん行く、こんなこと滅多にないからな。」

ひかる「シノブ、楽しんでない?」

母親「私も行くわ、行きながらシノブ君とゆっくり話もしたいしね。」

シノブ「そうですか、じゃあひかると麻里子は待つてろよ。

この男、すぐ連れてくるからさ。」

☆母親・シノブ、部屋を出る。

母親「ところで、本当はひかるとどういう関係なの？」

シノブ「え、本当にまだなんにもないですから安心してくださいよ。さ、行きましよう、お母さん。」

母親「まだ？お母さん？」

☆母親・シノブ下手に掃けながら暗転。

第4場

☆母親・シノブ下手から意気揚々と登場。

その後ろに容疑者Xと容疑者Xの彼女が付いてくる。

シノブ「連れてきたよ。」

麻里子「おかえ：え？」

彼女「あー、麻里子！」

麻里子「え？なんで？どういうこと？」

シノブ「え？知り合い？」

彼女「会社の同僚。同期で飲み友達。麻里子聞いてよー。」

この男とおばさんが怖い顔して彼氏を連れ出そうとするからさあ
あたし心配で心配で、ここまで付いてきちゃった。」

母親「問題はこの女性じゃないわ、こちらの男性でしょ。」

容疑者「あの、僕はどうして連れてこられたのでしょうか。」

理由を聞いてもとにかく来いの一点張りです。」

ひかる「すいません初めまして：容疑者Xさんですよね？」

シノブ「おい！」

シノブ「ひかる！いくらなんでもストレート過ぎるだろ！」

初対面の相手にいきなり容疑者Xとか、お前はバカか！」

容疑者「はい。そうです。」

シノブ「おい！」

容疑者「容疑者Xというのは僕がパソコンで使ってる名前です。」

ということは、あなたはキラリンさんですか？」

ひかる「そうです！キラリンです！」

キヤー！容疑者Xさん、こんな姿をしてらしたんですね！」

彼女「ひかるだからキラリン？：はんっ」

ひかる「鼻で笑うな！」

容疑者「それで僕はなんでここに：」

シノブ「この悪戯、あんたがこの手紙を出したんだろ？」

容疑者「手紙？僕は字が下手なので手紙は嫌いなんですよね。

年賀状もパソコンで済ませますし。」

彼女「あたしだってこの人から手紙もらったことないよ。」

シノブ「とぼけるなよ！イチジクの件でお互いの住所と名前を知ってて

顔も知らないし女だとは知らない。旅行に行ってたことも知らないければ聞く気になればパソコンで反応をうかがえる。お前しかいないだろう！」

容疑者「旅行のことなら聞いてましたよ。

帰ってきたらまた、お土産送るって言ってましたし。

それにキラリンって名前で、なんとなく女の方だとわかってました。」

ひかる「あ、これ。送ろうとしてたお土産です。」

シノブ「どういうことだ：こんなに条件が揃う人なんてそうそういないぞ：」

容疑者「ありがとうございます。その手紙というのは？」

彼女「これでしょ？【お元氣ですか？連絡がもらえなくて悲しいです。

ひよっとして私のことを忘れてしまいましたか？】」

【思い出を大切にしたいので、しつこく思われるのを覚悟でまた手紙を書きました。あの時やめておこうと思った子供の写真を同封します。元氣な男の子です。】

【会いたいです。今も、楽しかったあの頃を思い出しながら

この手紙を書いています。会って子供のことをお話したいんです。

勝手ではありませんが来週にでも伺わせて頂きます。】」

容疑者「他には？」

彼女「麻里子、続きはどこにあるの？」

麻里子「その3通で終わり、だから意味がわからないのよ。」

容疑者「なるほど。」

彼女「えー、でもさ、悪戯するときってネタばらしまでやりたくない？

実はこういうことでした、みたいな。」

母親「そう言われれば：そんな気もするかな。でも、今届いてるのはこれだけなの。」

ひかる「：あ！」

☆ひかる慌てて外へ出てポストを開け、4枚目の封筒を見つける。

封を開け手紙を出しながら部屋に戻る。

ひかる「ごめん、郵便屋さんが来たときにさ

恥ずかしくて今日の分を受けとる前に帰ってきたんだった。」

シノブ「はい！はい！俺！俺が読む！」

麻里子「小学生か！」

☆シノブ、ひかるから手紙を受けとって読み始める。

シノブ「先日、お手紙したようにお宅に伺いましたが留守のようで

近所の方に長期旅行中だと聞きました。少し心配していましたが避けられているのではないとわかり、ひとまず安心しました。

夫と、生まれた子との3人の生活も大変ですが、私は今とても幸せです。もうひとつわがママを言ってもいいのなら、やっぱりお会いしたいです。

お忙しいのなら電話でも構いません。連絡をお待ちしてます。

加賀美 知子】

母親「3通目までと打って変わって幸せそうな手紙ね。」

麻里子「余計に訳がわからなくなりましたけどね。」

ひかる「もういいじゃない。4枚目が幸せそうなおかげで怖くなくなったし。

容疑者Xさんも来てくれたんだからパーティーでもしようよ。ね。」

容疑者「お、一緒にいいんですか？」

彼女「あたしもいいの？」

母親「パーティーは大勢のほうが楽しいわよ。

じゃあ久しぶりに自慢の手料理を食べさせてあげよう。

シノブ君ちよっと片付けちゃって。」

☆母親袖を上げたりしてから奥に掃けようとする。

シノブ「こんなオチありかよ…。」

☆シノブ、5枚の紙をゴミ箱に入れようとする。

シノブ「おい！なんで俺のコレクションが捨ててあるんだ！」

ひかる「コレクション？あの郵便物の山のこと？」

麻里子「シノブの部屋なんて汚くて入れないよ。」

シノブ「じゃあこれはなんだ！この封筒は俺のコレクションの中にあつたはずだ！

宛名も村松シノブに…あれ？松村ひかるだ。」

母親「この4通目の手紙、その封筒に入ってたじゃない。見てなかったの？」

麻里子「4通とも全部それと同じ封筒に入ってたんだよ。」

自慢のコレクションじゃなくてよかったね。」

彼女「村松シノブと松村ひかる？苗字だけなら紛らわしいね。

悩んでないでさっさと結婚しちゃえばいいのに。」

ひかる「あ！」

容疑者「こら！しません。まだ秘密なんですよね。」

☆郵便屋、下手からポスト前に登場、ポストに郵便物を入れている。

シノブ「え？」

ひかる「違う！シノブ！」

あんたのコレクションの中にあるこの封筒って本当にシノブ宛て？」

シノブ「ひかる、悩んでるってなにを？」

ひかる「シノブ！しっかりして！郵便屋さんが新人なの！」

村松と松村のポストを間違えてるかもしれないの！」

一同「ああ！！」

☆郵便屋、声に驚いてドアを見る。首をかしげてから下手に掃ける。

母親「シノブ君、しっかりして。

ここでいい所を見せておけば、ポイントアップできるかもしれないわよ。」

シノブ「…！はい！いま取ってきます！すぐ取ってきます！」

☆シノブ奥に掃けるが、すぐに戻ってくる。

第5場

シノブ「はい！お母さん！」

彼女「はやっ。」

容疑者「彼も必死なんだよ。」

母親「ありがとう。やっぱりそうね、松村ひかる宛てになってるわ。

郵便屋さんが間違えて村松のポストに入れたのね。」

シノブ「はい！はい！俺読みます！」

彼女「はい！あたしも読みたい！」

母親「んー、じゃあシノブ君はさっき読んだから我慢しましょうねー。」

麻里子「幼稚園か！」

容疑者「なんかすいません。」

ひかる「いえいえ、女性からの手紙ですから女性が読んだほうがいいと思いますよ。」

彼女「【お久しぶりです。

小さな教会で、2人と2人の両親だけでささやかながら式を挙げました。】」

シノブ「お久しぶり？ってことはこれが本当の1枚目なのか！」

母親「結婚の報告を突然したら、連絡がきて当然だと思ってもおかしくないわね。」

麻里子「それでもなかなか連絡がないから、結婚の報告のことを忘れてますかなのね！」

彼女「【子供も生まれました。写真を同封しようかとも思いましたが

また今度会える時に連れて行こうと思います。】」

母親「これだ！あの時やめておこうと思った子供の写真！」

ひかる「え？どういうこと？」

母親「だから！あの時やめておこうと思った子供、の写真じゃなくて！」

シノブ「あの時やめておこうと思った、子供の写真！ですよね！お母さん！」

母親「そう！シノブ君なかなかやるじゃない！」

麻里子「ってことはこの3枚目【会いたいです】

今も、楽しかったあの頃を思い出しながらこの手紙を書いています。会って子供のことをお話したいんです。

勝手ではありませんが来週にでも伺わせて頂きます。【っていうのは…】

容疑者「ひかるさんの知ってる人が結婚して子供を生んで

また今度子供を連れて幸せ自慢をしに来るね、ってことじゃないですか？」

彼女「まだ続きがあるよ。【出産をきっかけに引越しをしました】

新しい住所と電話番号を書いておきます。

加賀美 知子。 旧姓 内田 知子【】

ひシ麻「知子！」

ひかる「知子じゃん！うわ、懐かしい！」

シノブ「マジで？あいつ結婚したの？これ知子の子供？」

麻里子「また さ き こ さ れ た …」

容疑者「あのか…」

彼女「誰かわかったなら連絡してあげれば？」

母親「そうね、電話番号も書いてあるみたいだし。」

ひかる「うん！」

麻里子「早く早く！」

シノブ「ほら急げって！」

☆ひかる電話をかける。シノブ・麻里子はその両横にいる。少しの間。

ひかる「もしもし、知子？私！松村ひかる！ごめんねー。ちよっとバタバタしててさ。」

シノブ「知子、結婚おめでとう！」

麻里子「知子ばかりずるいぞー！」

☆幕が降り始める。

ひかる「あ、ごめんね。そう、一緒に住んでるんだ。

今度3人で遊びに行くよ！うん！あはは、そうだね。

旦那さんどんな人なの？……」

☆幕が降り切るまでひかるは話続ける。